

NEWSLETTER

No.70

11 May 2018

・教員の研究室と電話番号・メールアドレス	1
・2018年度教員在室時間表	2
・活躍する卒業生（8）	3
・一口地理コラム：ウバメガシ	4
・大学院生紹介	5
・新刊案内（加藤幸治著『スイスの謎—経済の空間的秩序—』春風社）	6

【教員の研究室と電話番号・メールアドレス】

※地理・環境専攻専任教員は全員世田谷キャンパス(世田谷・梅ヶ丘校舎)にいます

	研究室の場所	研究室電話番号	電子メールアドレス
長谷川	世田谷校舎 10号館 2F1003 研究室	03-5481-5247	hasegawa@kokushikan.ac.jp
岡 島	世田谷校舎 10号館 2F1002 研究室	03-5481-3245	okajima@kokushikan.ac.jp
佐々木	世田谷校舎 10号館 2F1004 研究室	03-5481-3246	akihikos@kokushikan.ac.jp
内 田	世田谷校舎 10号館 4F1025 研究室	03-5481-5291	uchida@kokushikan.ac.jp
磯 谷	梅ヶ丘校舎 34号館 8F 824 研究室	03-5451-8154	isogai@kokushikan.ac.jp
加 藤	梅ヶ丘校舎 34号館 9F 904 研究室	03-5451-8164	k2kato@kokushikan.ac.jp

※教員が大学に在学予定の時間等は、次ページの教員在室時間表を参照してください。オフィスアワーは、基本的に先生が研究室にて、学生の質問等に答える時間です。

※オフィスアワー以外の面会・相談なども在室中に短い時間で済む用事であれば、大抵の先生は急用がない限りは応えてくれます。ただし、基本的には相談や面接等は、事前にアポイントメント（Appointment；アポ）をとってからするようにしてください。オフィスアワーであっても、出張等で不在の場合や、他の相談者などがいるため時間が割けない場合もありますので、事前にアポを取る方がお互いに好都合です。大学生としての自覚をもった行動を心掛けましょう。

※したがって、教員の自宅、特に非常勤講師の先生宅への電話は、先生からの指示がない限りは控えてください。

※メールを活用しましょう。多くの先生が電話よりもメールでのアポの方が好都合です。ただし、教員のメールアドレスは携帯電話のものではありませんので、すぐ返信がくるとは限りません。余裕をもった連絡を心掛けてください。アポの際には、メールの標題に、学籍番号・氏名を明記してください。先生によっては、標題に番号・名前がないとメールを消してしまう場合があります（迷惑メール・ウィルスメール対策のため）。用件が必ずしも標題になくても大丈夫です。「こんにちは」といった標題のメールは即刻消される場合があるので注意してください。

【2018年度 教員在室時間表】

凡 例：

==== 講義中 _____ オフィスアワー - - - - - 在室の場合が多い

※春のみ：春期のみ講義。 ※秋のみ：秋期のみ講義。

※金曜日は文学部関係の会議が集中する日です。会議のある先生は大学にいますが、ほとんど会えない場合もありますので、注意してください。第3または第4金曜日には**教室会議**（12：00～）・**教授会**（13：30～）があり、教員全員が会議に出るので、その日の午後はほぼ会うことができません。教授会の日程は年間予定表を参照してください。

曜日	時限 時間	1	2	昼休み	3	4	5	6
		9:00-10:30	10:45-12:15		12:55-14:25	14:40-16:10	16:25-17:55	18:10～19:40
月	長谷川	
	岡島		====		====	====	====	
	磯谷	
	加藤	====	春のみ		====	
	佐々木	
火	長谷川	====	
	内田	春のみ	====		====	秋のみ	====	
	岡島		春のみ	====
	磯谷		町田校舎		秋のみ
	加藤	====		====	秋のみ	春のみ
	佐々木	秋のみ		秋のみ
水	長谷川	====		====	
	岡島		====		====
	磯谷	
	加藤	
	佐々木	====
木	長谷川	====		====	====	
	内田	春のみ	====		====	秋のみ	====	
	磯谷	
	加藤	
	佐々木		春のみ	====
金	長谷川
	内田	
	岡島	
	磯谷	
	加藤	
	佐々木	
土	内田	====		====			

※ 加藤先生のオフィスアワーは火曜の4限（春期）または5限（秋期）です。

【 活躍する卒業生(8) 】

シリーズ「活躍する卒業生」の第8回目。今回は、2002年度に地理学専攻を卒業し、2004年度に大学院修士課程を修了された内山慶之さんです。内山さんは、本学大学院修了後、プロの生物環境調査者として活躍されています。出張が続くお忙しい時期ではありましたが、原稿を寄せていただくことができました。

--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--*-*-*--

フィールドワークによる自然環境調査の仕事

内山慶之（2002年度卒・2004年度修了。現所属：(株) 緑生研究所）

私は、1999年の入学から、学部4年、大学院修士課程2年、研究生として1年、合計7年間の長い間、国土館大学の地理学教室の先生方にお世話になりました。その後、生物調査に特化した自然環境調査の調査員として、有限会社植生技術という小さな会社で2005年から2012年8月まで修業した後、フリーランスの調査員として2017年3月まで一人で活動していましたが、縁あって2017年4月から現在の職場である株式会社緑生研究所に勤務しています。

生物調査に特化した自然環境調査の調査員の仕事について少し紹介します。現在の職場の主な業務内容は、開発等の事業実施における環境影響評価をはじめ、緑地や公園を造る際の緑地計画のプランニングや管理手法の検討なども行っています。その中で、私は主に植物分野を担当しており、現地調査によるデータ収集や整理を担当しています。一つの業務で実施する調査は項目が多岐にわたるため、社内では植物の他に哺乳類や昆虫等の各専門分野に分かれて仕事をしています。業務の現場は全国各地にまたがり、植物分野の場合、繁忙期である春～秋は出張続きで忙しくなり、ほとんど家に帰れない生活がつづきます。

では具体的に現場で行っている植物調査について紹介しましょう。植物担当の調査の項目は多岐にわたりますが、主なものをあげると次の3つの調査になるでしょう。



写真1

・植物相調査（写真1）

調査地の環境をくまなく歩きまわって植物の種類を記録する。調査地の環境は様々で林、川、水田等の環境がある。これらの環境をつないだルートを歩き、様々な環境を調査することにより、最終的にリスト形式の目録を作成して納品する。



写真2

・植生図作成調査（写真2）

河川やダム等調査地域の植物群落の分布状況を地図に記録する。最終的にGIS等で植生図を作成して納品する。



写真3

・公園等の樹木を調べる毎木調査 (写真3)

公園等調査地域の樹木の位置、樹高、胸高直径等を計測して、記録する。最終的にGIS等で位置図、管理台帳等を作成して納品する。

これを見てピンときた学生もいるかと思いますが、その気になればこれらの調査、植物相調査を除いて実習等大学の授業で習う機会がありますよね。私は学生時代、雲取山原生林や伊豆半島で行っていた磯谷先生の調査に同行させていただき、植生調査の基礎を教えてもらいました。それ以来、ひとりで調査が出来るよう意識して植物を覚える努力、GIS、地形図の読み方等の勉強に没頭してきました。

結局は、この延長線上で今の仕事につくことになりました。つまり学生時代から日常的にやっていることと、今の仕事は一貫していて、ほとんど変わらないわけです。皆さんもなにげない学生生活の中で気にいった事、興味を持って取り組めることを突き詰めていく姿勢をつらぬければ、将来の仕事につながるかもしれません。皆さんが学生生活で身につけた知識や技術を生かしてご活躍されることを願っています。

【一口地理コラム:ウバメガシ】



写真 香川県さぬき市で地理学野外実習Cの合間に撮影されたウバメガシ。
ドングリのお皿(殻斗)は、コナラなどと同じく瓦模様です。

地理学教室の人には是非とも知っておいてほしい、見分けられるようになってほしい樹種がいくつかありますが、その一つが上の写真のウバメガシです。高級料理店などで使われることで有名な「備長炭」は、このウバメガシから作られた白炭です。そして、高校地理の教科書にも出てくる、地中海性気候の地域でみられる硬葉樹林の主要な樹種(コルクガシなど)は、このウバメガシの仲間なのです。上記の内山さんは、学生時代は伊豆半島でウバメガシ林の研究をされていました。

常緑広葉樹のウバメガシが自然状態で分布するのは太平洋沿岸域の岩場などに限られますが、大気汚染に強い樹種なので道路の中央分離帯によく植えられているほか、民家の生け垣などとしても植えられています。世田谷キャンパスの近くでもウバメガシが植えられていますので、皆さんも探してみてください！
(磯谷達宏)

【 大学院生紹介 】

修士課程1年生 西山笑莉



修士課程1年の西山笑莉です。私はこの春、学部生から院生になりました。現在は内田先生のゼミに所属しており、観光地理学を専門として研究に取り組んでいます。

私が地理学に興味を持ったのが、中学の地理の授業で東京都の立体地図を作成したことでした。等高線を調べたり、地域ごとに土地の高さを横から見て比較したりして面白い、楽しいと感じた事がきっかけでした。その頃は、大学で地理学を専攻し、大学院まで進むなんて考えてもいなかったです。大学で地理を学んでいると言うと、友人は地理なんて苦手だ、嫌いだとみんな口を揃えて言っています。確かに、高校の地理は選択科目でしたが、300人いる学年にも関わらず、履修

者は20人ほどしかいませんでした。地理＝暗記という概念が強いだからだと思いますが、大学の授業を受けると一目瞭然ですし、どの先生のお話も面白く、学ぶことばかりで大変魅力的だと感じています。

私は神奈川県中央部に位置している厚木市という場所に住んでいます。といっても残念ながら、神奈川以外の特に千葉、埼玉の人には厚木ってどこ？などと言われる事がほとんどです。元々は、相模川を利用した河川舟運が盛んな場所でした。しかし、鉄道の開通により町の中心は移動し、現在、現地へ足を運ぶと、川の近くの商店街はシャッター通りとなり、閑散とした寂しい雰囲気が漂っています…のような話をネタとして持っています。誰かと話をする時、地名等の話をする時、盛り上がる事が多く、面白さを感じています。ここで気を付けることはその話はデタラメ、嘘ではないかということです。これは論文を書く上でも、社会人になってからも注意しなければならないことですね。

それから、地理を学ぶことで自分の可能性や幅を大いに広げる事が出来ると実感しています。長期間、旅をしていた同級生もいましたし、他にも人文地理のゼミに入りたいという後輩の子がいたのですが、3年次に自然地理のゼミに入っており驚きました。私は人文地理を主としていますが、学部生時に自然地理も学んだこともあり、自然系の県立博物館でボランティア活動も行っています。

2年という短い時間ですが、大学院での様々な体験を通して知識を吸収し、修士論文の完成に向け頑張ります。

修士課程1年生 劉 慧敏



修士課程一年の劉慧敏です。私は中国の山西省の出身です。大学の学部での専攻は日本語でした。学部の4年間で日本語を勉強したので、日本文化への興味が深くなりました。

私は旅行に行くことが好きです。大学生になってから、毎年の夏休みを利用して、興味深い観光地に行きました。綺麗な景観を見るだけでなく、地方の伝統文化や風土色などを勉強しました。観光は、地域特有の発展を学ぶのに重要な意義があると考えています。そのため、大学を卒業してから観光文化を深く研究したいと思いました。それに

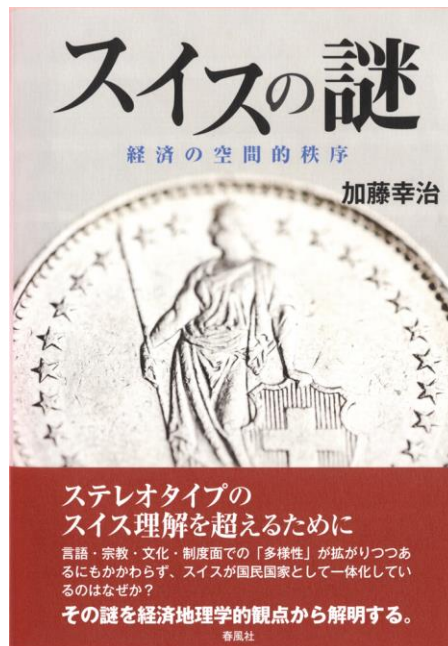
日本の生活を体験したかったので、日本に留学することを決めました。

日本は観光大国として世界中に有名ですから、私は自分の興味と研究を結びつけたいと思っています。そのため、観光地理の研究をしたいと考えています。これから修士課程の二年間に内田先生のご指導のもと、修論のために一生懸命に頑張っていきます。

よろしくお願ひいたします！

【教員スタッフ近著】

加藤幸治（2018）：『スイスの謎：経済の空間的秩序』春風社，2700円＋税。



2015年度国士舘大学学外派遣研究員として、スイス・チューリッヒ大学チューリッヒ大学地理学教室（Universität Zürich Geographisches Institut）に Akademischer Gast（Visiting Professor）として滞在した加藤幸治先生がその研究成果をまとめた一冊。

「スイスは日本でもなじみ深い国である。しかしながら、その『実態』，とりわけスイス国内における『地理的現実』については必ずしも明らかではない。」という本論（第1章）の書き出しにあるとおり、スイスの「地理」，あるいはスイスに関する地誌学的理解は必ずしも進んでいない，それは日本に限らず，世界的に見ても，である。

それは、「スイスの『多様性』」という「事実」が理解を阻むがゆえでもある。スイスがいかに多様なのかを「記述」することは、地理的アプローチとしては意義あるものだとしても、それを個別バラバラに見るだけであれば、スイス理解への深化にはつながらない。「多様性」を持ちつつも、一方でスイスが「スイスとして一体化している」のはなぜか？それを統一的に理解することこそが、スイス理解にとって重要である。こうした考え方が、本書の標題を「スイスの謎」とした背景にはある。

ところで、一見バラバラなスイスであるが、それは地理的領域（国という政治的領域）が設定されているがゆえに（言い換えれば「同じ国の近所同士だから適当に仲良くしている」といった理由で）一体化しているわけではない。そこにはそれ相応の「理由」や要因がある。この点に気付かされたのは、スイスの産業立地や人口動向・人口移動の実態をみる作業を通じてであった。経済地理学的観点からは、「『多様性』を持ちつつも、一方でスイスが『スイスとして一体化している』のはなぜか？それを統一的に理解すること」が比較的容易に可能なことが研究を通して見えてきたのであった。

こうした「謎解き」を再構成したのが本書である。それはスイス理解の深化と「スイスの謎」の解明を同時に行うことでもあった。

なお、ここで鍵となるのは本書の表紙とも大いに関係するものでもありますが、さてそれは何でしょう？それは読んでの「お楽しみ」にしておきたいと思います。

本書は「ヨーロッパの環境と人間生活」の教科書としても使いますので、興味ある人は受講してくれれば、授業の中でも詳しく解説していくつもりです。

（加藤幸治）